

Economic Policy and Projects:
The Development of a Consumer Society in
Early Modern England

消費社会の誕生

近世イギリスの新企業

ジョオン・サースク 著
三好洋子 訳

東京大学出版会

Economic Policy and Projects:

The Development of a Consumer Society in

Early Modern England

消費社会の誕生

近世イギリスの新企業

ジョオン・サースク 著

三好洋子 訳

東京大学出版会

訳者略歴

1922年 東京都に生る

1949年 東京大学文学部西洋史学科卒業

東京都立大学人文学部教授を経て

現 在 聖心女子大学教授

主要著書・訳書

「イングランド王国の成立」(1967年, 吉川弘文館)

「中世に生きる人々」(アイリーン・パウア著, 1969年,
東京大学出版会)

「イギリス中世村落の研究」(1981年, 東京大学出版会)

現住所

東京都目黒区大岡山 1 丁目 29-2 (〒152)

ジョオン・サースク

消費社会の誕生——近世イギリスの新企業

1984 年 9 月 25 日 初 版

[検印廃止]

訳 者 ^{みよしようこ}
三好洋子◎

発行所 財団法人 東京大学出版会

代 表 者 田中英夫

113 東京都文京区本郷 7-3-1 東大構内

電話 (811) 8814・振替東京 6-59964

印刷所 株式会社三陽社

製本所 矢嶋製本株式会社

ISBN 4-13-023031-X

23313

日本語版への序文

現在、世界における先進諸国の生活の著しい特徴の一つは消費商品のあふれるほどの豊かさである。その結果、発展途上国を訪問した者は、消費商品の欠如を経済貧困のもっとも明白な外観上の標識として指摘する場合も少くない。したがって、この消費用品への執着がいつから始まったかを調べてみたい好奇心に、歴史家が駆りたてられるとしても、それはきわめて当然のことであろう。

本書において、わたくしは、消費用品の起源を、イギリスについて一六世紀までさかのぼって尋ねてみたい。一六世紀には、生活必需品以外のつまらぬ贅沢品が、極貧の人びとを除くすべての人びとにとって購入できる価格となったのである。これまで、大規模な消費用品の国内市場の成立は一九世紀の産業革命との関連で考えられていた。また、たしかに、機械生産が、入手できる安物商品の範囲を著しく拡大したことも真実である。しかし、実際には、消費社会は二世紀ほど前に誕生していた。この時、経済的および社会的諸要因が諸国民間の製造業的・商業的・個人的接触をより積極的に促進し、ごく簡単な技術上の改良が商品の大量生産を容易にした。なかでも特に重要なことは、全く雇用されていない、さらには不完全にしか雇用されていない労働力を動員して、手作業で消費用品の製造

を行ったことである。同時に、ルネサンスと宗教改革とが新生活体制と新流行とを先導する新思想を浸透させた。その結果、新しい需要の安定した水路——これには創意に富む人びとだけが新しい方法で対応することができた——が創り出された。新大陸の発見、印刷術の発明などは地平線の拡大に役立ったばかりでなく、職人の手に新しい原料をもたらしたのである。

この発展を促進した諸状況のめぐり合わせを提示し、イギリスにおける消費革命の究極的意味を明らかにするために、わたくしは歴史が演じた番狂わせのいくつかについても、ここで述べよう。というのは、輸入削減のため、消費用品の製造を、初期のころ、試験的に奨励した政治家は、当初、全く予想もしなかった新企業の時代へと人間を駆りたてる活動力を放出したからである。ついに、一六、一七世紀の新企業は一八世紀の産業革命の基盤を用意したばかりでなく、諸国民の富についての経済学的思考を変化させた。諸国民の富を国内に蓄積された金・銀の量で測定するという考え方は、労働人口の数でこれを測定するという新しい方法へと道を譲った。しかし、この話の始めの部分を知っていた者は、誰も、それがどのような結末になるかを推測することはできなかった。

わたくしは、現在をより長期的展望のなかで考察するために、過去を蘇生させようとするこの人間経験探究の書を日本語版の読者が喜んで下さると思う。また、日本の読者は本書の記述の中に、イギリスの経験と日本のそれとの類似点をいくつか認められることであろう。この類似点こそ、過去三〇年余にわたって、わたくしたちイギリス・日本両国の経済史家を結び、多くの友情を培ってきた共通テーマの一つである。本書の日本語訳の出版も、このような友情の一端に由るものである。聖心

女子大学教授三好洋子氏は拙著の翻訳を提案され、これを完成された。訳業に費やされた彼女の時間と労苦とにたいして、十分に感謝する言葉を知らない。この訳書の出版を機に、本書のイギリスおよび日本の読者が相互の友情をますます深めることは、わたくしたちにとって、この上ない喜びである。このことを願って筆を擱く。

一九八四年四月

オックスフォード大学セント・ヒルダス・カレッジ

ジョオン・サースク

はしがき

簡潔が知の真髄であるならば、フォード講義^{レクチャー}の主旨もまたそれである。わたくしは原文をきりつめ、広範な主題をわずかなスペースに圧縮したため、公刊にさいして、これを原型にもどしたい誘惑にかられた。しかしわたくしは、さきの講義の主題をより広範な経済的背景の中で考察するための終章を加え、これをほぼ原形のままここに公刊する。

一九七五年冬学期のオックスフォード大学のフォード講義に、わたくしをお招きくださった詮衡委員各位に、深く感謝する。当時わたくしは手許にテーマを準備していなかったが、一六世紀後半から一七世紀に設立された新しい産業と新しい型の雇用に興味をもっていた。それまでに、わたくしは靴下編み工業とタバコ栽培業とについて多少の研究を進めており、そのほかの職業についても目録づくりを始めていた。さらにその頃、わたくしは『一七世紀経済史資料^{*}』という書物の索引を作り終えたところであった。この退屈な作業は思いがけないことに、わたくしの心の眼を開いてくれたのである。真鍮の料理鍋、上質の亜麻織物、金・銀糸、帽子、ナイフ、レース、ポルタヴィス織、リボン、ひだ襟、石けん、テープなどの消費用品がそこであまりにも繰返し語られていることにわたくしは驚いた。

索引作りという作業は、このような瑣細な品目にあつきりと眼を走らせることを許さなかった。わたくしは一つ一つの品物に注意し、一七世紀経済に占めるこれらの商品のもつ意味を考えずにはいられなかった。そのなかには、一五四七ころ、この国から金塊を強奪する安びかの舶来品として徹底的に批難された消費用品が入っていることを知った。しかもこれらの品物は、一七世紀には、日用品となっていたばかりでなく、さらに注目すべきことには、イギリス国内でつくられていたのである。わたくしはこれらの商品の由来をたずねることに決めた。結局、本書に記されているように、政策が慎重審議のすえ、消費用品の国内製造を奨励したことがわかった。この政策は成功し、多くの予期しなかった成果をもたらした。新職業は大量の雇用を提供したばかりでなく、商品の多様化と消費の拡大によって国内市場に新しい局面を拓いたのである。ついに、これらの新職業は古い経済学を浸蝕し、これを変形させるという結果を導いた。一八世紀中葉、アダム・スミスが「消費はあらゆる生産の唯一の目的である」と述べ、分業の最適の例としてピン製造業を取上げたとき、スミスは一七世紀の経験のエッセンスを抽出して理論へと昇華したのである。

* Joan Thirk and J. P. Cooper (eds.), *Seventeenth Century Economic Documents* (Oxford, 1972).

本書は、経済政策、製造業と農業における新職業の誕生、経済学の新理論の発生の由来などをたずねつつ、明らかに研究を深化すべき価値があると認められる一七世紀の多くの職業について、簡単に考察するものである。わたくしは大青栽培、糊製造、ピン製造について詳しく語りたいと思うが、ほかの方々がわたくしの熱意に共感され、これまでほとんど看過されてきたこのほか多くの消費用品

の製造業に興味をもたれるように希望する。

主題の展開につれ、わたくしとともにこの問題に関心を寄せてくださった多くの方々に感謝する。なかでもわたくしの大学院生 Paul Brassley, Peter Edwards, Peter Large, Mary Prior, Adrienne Rosen, Malcolm Thick, Barbara Todd, Roger Vaughan の諸氏は実例の素材を注意深く集めてくれた。ここにいちいち御名前を記せぬほど多くの同僚たちは、時には知らぬ間に、正しいものの観方を教えてくれた。しかし、Professor Maurice Beresford, Dr. Maxine Berg, Dr. John Chartres, Mr. J. P. Cooper, the late Mr. J. W. Gough, Mr. Negley Harte, Mrs. Carolina Lane, Professor Peter Mathias, Dr. Roger Richardson, Dr. Paul Slack, and Mrs. Marion Stowell の諸氏にたいしては是非にも御名前をここに記して感謝の意を表したい。最後になったが、Dr. Christopher Hill にたいしてはとくに深い感謝の意を捧げたい。かれの励ましによってわたくしはこの主題を最後まで追求することができたのである。

一九七七年三月 オックスフォード

ジヨオン・サースク

凡
例

一、本書は Joan Thirsk, *Economic Policy and Projects: The Development of a Consumer Society in Early Modern England*, Oxford, 1978 の本文の全訳である。

一、原書の脚註は巻末にまとめた。ただし、未刊行史料からの引用・参照等の出典提示、および文献・資史料等の指示に関する謝辞などを記した原書の註は、行文上必要なものを除き、そのほとんどを省略した。また、著者の了解を得て、日本人には余りにもなじみのないごく一部の商品名を割愛した。

一、本文中「」内および段落の間の註は訳者によるものである。

一、口絵は原書にはないが、読者の便宜を考えて附したものである。

略語表

AHEW	<i>The Agrarian History of England and Wales, IV: 1500-1640</i> , ed. Joan Thirsk (Cambridge, 1967)
APC	Acts of the Privy Council
BL	British Library
CSPD	<i>Calendar of State Papers Domestic</i>
DNB	<i>Dictionary of National Biography</i>
ECHR	<i>Economic History Review</i>
Eng. Hist. Rev.	<i>English Historical Review</i>
HMC	Historical Manuscripts Commission
LQR	<i>Law Quarterly Review</i>
Oxf. Rec. Soc.	Oxfordshire Record Society
PRO	Public Record Office
RO	Record Office
TEJ	R. H. Tawney and E. Power, <i>Tudor Economic Documents</i> (London, 1924)
Thirsk and Cooper	Joan Thirsk and J. P. Cooper (eds.), <i>Seventeenth-Century Economic Documents</i> (Oxford, 1972)
VCH	Victoria County History

目次

日本語版への序文

はしがき

I 序章

II 諸企業の創設時代 一五四〇—一五八〇

III 腐敗の時代 第一部 一五八〇—一六〇一

IV 腐敗の時代 第二部 一六〇一—一六二四

V 商品の品質と顧客層

VI 企業と経済学

VII 終章

原註

訳者あとがき

索引

205	172	137	101	67	34	3
-----	-----	-----	-----	----	----	---

消費社会の誕生

——近世イギリスの新企業——

I 序 章

I 序 章

一つの時代の著作にしばしばあらわれる言葉、しかもその時代の雰囲気と傾向を想起せしめる言葉の根元をたずねることは楽しい作業であり、また教えられるところが多い。一五三〇年代、四〇年代の説教、パンフレットには「食欲」と「コモンウィール」*の二語が繰り返しあらわれる。この二語は正反対の意味をもち、この時代の渇きと温もりをはっきりと照し出す。金持ちの食欲がのさばり、社会的良心をもつ思慮深い人びとに焦燥感を与えた。「コモンウィール」は古い社会に代る新しい社会を模索する人びとの願望を端的に示す言葉であった。かれらは一時、コモンウェルス派という名称でよばれるほどがっちりとしたグループを組織した⁽¹⁾。摂政サマセット公の時代、かれらは政府にたいして大きな勢力をもち、公の失脚とともにその勢力を失った。しかし、コモンウェルスメンの理念は施政者層のなかに支持者を得て、一六世紀後半の経済政策と社会立法に大きな影響を与えた⁽²⁾。その後六〇年間、「コモンウィール」という言葉は社会経済思想・政策を説明するものであった。

* コモンウィールは民富と訳すこともできるが、それよりはるかに広く、かつ深い意味をもち、本書における重要なキイ概念の一つであるため、原語のまま使用する。

しかし、一六世紀末に近づくと、コモンウィールというこの抽象的理念への関心はもつと具体的な関心になり、一七世紀になると、新しい時代を特徴づける要の言葉は「企業」と「企業家」という二語となった。未来に夢を託す人びとは、それが金儲けの夢であれ、貧困者雇用の夢であれ、あるいは地の果て探險の夢であれ、いずれも「企業」をおこした。企業という具体的な名詞は重要である。企業とは具体的なものを開発するための実際の組織であり、勤勉と考案の才なくしてこれを実行に移すことはできなかった。それはコモンウィールというような実現不可能な夢ではなかった。しかもそれは雇用を創造し、社会諸階層の間により多くの現金をまき散らし、実質的にはコモンウィールを大幅に増進させた。一七世紀の企業が経済の内部に浸透するにつれ、経済構造は変化した。企業は地理的にも社会的にも富の再配分を達成した。つまり、地理的には新製造業と新農作物がこれまで陽のあたらなかつた辺境地域に新しい雇用と新しい商業観とを導入し、社会的には現金が新しい水路を通じて社会の底辺に生きる労働階層をこれまでより広範囲にうるおしたのである。

企業が僅かながらも外国貿易のパターンを変化させたのはかなりあとのことである。一七世紀末までに、多くの企業は安定した産業となり、外国貿易会計帳に記録されているような商品をつくり出すまでになった。一六世紀には、毛織物が輸出品の首位を占めていたが、一七世紀になると、植民地商品の再輸出のみならず、本来、国内市場向けに生産されたさまざまな国産品が毛織物と肩をならべて輸出されるようになった。たとえば、毛の編み靴下、編み帽子、フェルト帽、鉄製鍋、フライパン、ナイフ、刀剣の刃、短剣、釘、ピン、ガラスびん、手袋、陶製つば、銅器などで、農場や市場向け菜

園の特産物であるサフランやホップももちろん輸出された。これらの商品は、一六世紀後半から一七世紀にかけて企業として立派に成長し、なかには非常に小さな企業もあったが、ついには輸出貿易を行うまでになった諸種の業種について語ってくれるのである。一六六〇—一七〇〇年の間、これらの雑貨の輸出伸長の速度は「再輸出の伸びに劣らなかつた⁽³⁾」とラルフ・デイヴィス教授は書いている。

しかし、海外貿易の数字は経済に占める企業の重要性の正しい尺度とはなりえない。これを基準とするならば、企業の発展を過小評価することになる。外国貿易は国内の農工業総生産のごく一部にすぎない。一六八八年、グレゴリー・キング（一六四八—一七二二。系譜学者、彫版師など活躍した分野は広いが、統計家として著名）は、総生産額四八〇〇万ポンドのうち輸出は三四〇万ポンド、つまり総生産額の七％にすぎないという概算を示した。⁽⁴⁾本書で考察する企業の大部分は国内消費用に生産された非常にさまざまな商品、つまり総計四四六〇万ポンド、総生産額の九三％を占める商品に関する企業のうち、とくに目につくものである。

ところで、上述の諸企業は国内消費用品を製造し、あるいは畑で生産する組織であった。それらは主として国内市場に供給するものであったから、むづかしい手続きをとることなく、国内のあちこちに分布し、統計的史料を残していない。このような商品を行商人は背中にしょったり、駄馬の荷鞍につんで地方を売り歩いた。また、このような商品は梱包されて河川を上下する伝馬船で輸送されることもあり、さらに袋や箱につめこまれて、大小の荷馬車をかかえる定期輸送業者に委託されることもあった。かれらは田舎町の商人宿をバス停のように利用したのである。田舎町には通行税や仲介手数料